

Ⅰ)の方は、南側大通りに面した街区外から直接の南入りの入口に恵まれ、位置的にアクセスの利便性が高い上、上流階級の住宅で規模も比較的大きいことから、宿泊施設がその一部に組み込まれた会館施設として再生する。将来的には、隣にレストランを設置することで、集会所へのケータリングサービスや、宿泊施設からの利用なども可能になる。この場所は現在すでに取り壊されているため、レストランとして再生する建物は別街区からの移築となる。

さらに、この街区内に現存する古い住居のうちから、保存状況のよい住居を選んで博物館や土産品店への転用を計画している。

この街区の建物をすべて満州族の四合院住宅で計画するには、その残存数はあまりにも少なく、しかもその大半はオリジナルの形を大きく失っている。そこで、比較的保存状態のよい数少ない住宅を、公共施設として再生していくために、原則として、ひとつの施設につき最低限ひとつのオリジナル住宅を組み込み、そのほかは新築の現代建築によって補うという方法をとることにした。

現存の古建築と現代建築との調和をどのように考えるか。これは、古建築を残しつつ新しい建築や街並みを創造していく上で、常につきまとうテーマであるといつてよい。

ここ瀋陽の歴史街区の街並みの整備においても、「古典に真髄を

学びながら、古典の型に拘束されない」という計画上の原則がある。経済的な発展を図るために新しい建築物の建設を制約しない。しかしその一方で、歴史建造物への調和に配慮しなければならぬが、これは高さや配置の制約を意味するだけでなく、様式的、色彩的な古典建築群との調和を目指しているように、古典建築を取り巻く周辺の現代建築群は、饒舌に伝統的建築言語を語ることを許されているようにだ。

しかし、こうしたデザイン調和は、時として本来の主役の影を薄める危険性をほらみ、また模倣品としての安易さを露呈することにもなりかねない。

主役を主役として際立たせることに徹するために、今計画では、この「古典の型に拘束されない」という言葉の意味を、「様式の調和からの解放」という別解釈に置き換えることによって、レプリカの混在を避けたいと考えている。わずかに残る伝統建築を最大限に活用し、その真実の姿を引き立てていくためには、伝統に類似した模造品の存在は、かえってオリジナルの建物の価値を引き下げかねない。

そこで、伝統建築に對峙しつつも、これを尊重する目的でデザインされた、現代建築を調和させることによって、歴史街区にふさわしい建築群を構成していきたい。新しい建築を付加する上での基本的ルールとしては、オリジナルの原則を尊重し、全体的な調和を図

るということ。すなわち、規模を既存建築以下に抑え、小さな建築が外部を介して連続する伝統的な形態をとり、やむをえず建築同士を内部で連続させる場合には、最小単位の建物を軽快かつ透明なヴォイドでジョイントすることによって、建物群のリズムを壊さない配慮を行っていくつもりである。

元来、伝統的な四合院住宅は、四周が塀で囲われた閉鎖的な構造である。しかし都市に開かれた新しい歴史街区への再構成にあたっては、管理を必要とする宿泊施設の外周を除いて、あえて塀は取り払うことにした。オープンな施設にすることによって、伝統建築をより身近な存在として感じることができ、なおかつダイレクトに建築が見えることで、アクセスを促す効果があるからだ。塀を撤去したことによって当時の住居街の趣をなくさないために、門を入口に据えた石畳の街路は復元する。またこの石畳には要所所に休息スペースを設けるなど、人々が憩える公園的な場所としても計画している。

この街区におけるもうひとつの重要な外部空間として、建物に囲まれた中庭部分がある。元来四合院住宅の中庭は、子供の遊び場、冠婚葬祭や宴会など、家族の共有空間としてさまざまな用途に使われる場所であった。四周を取り囲む家屋の大きな開口部は中庭に内面するため、中庭は樹木や草花などによって快適に演出されること

が多い。新しい用途に変換された後の中庭も、住居機能を果たしていた時代と同様に、重要なスペースとなるべきであり、研究所では植栽を配した庭として、会議施設では屋外の集会場としての活用を考えている。特に会議施設の中庭は、集会やイベントの規模に応じて、仮設屋根を架けることなども検討している。

### 住宅建築の保存と再生

今計画の中心となる2棟の四合院住宅は、他の住居に比べるとその保存状態は比較的良好なもの、やはりかなりの部分に改築や増築の手が加えられているので、創建当時の姿に戻すためには、修復や復元が必要になる。

修復や復元にあたっては、装飾・材料・技術のいずれの面においても、できるかぎり忠実に伝統に従うことを原則とするが、そのオリジナル性を見極めに関しては、居住者の代替わりにより、当時の正確な姿を十分に検証できない場合もある。現在の姿が、純粹に満州族の形態や装飾そのままであるのか、あるいは建設以降の漢民族の影響があるのか、その判断が難しい。こうした箇所においては、赫圖阿拉(ホトアラ)に残る「滿族民居」(農村型)にならった手直しを行うか、もしくは現状そのものを「時間の痕跡」として保存し、歴史を終った姿としてとめていきたいと考えている。

滿族民居における内部空間の最大の特徴である「炕」(満州族の

住居に特有の局部的な床下暖房システム)は、新しい用途の機能に支障をきたさない範囲で保存し、さらに、改築後撤去された箇所の復元も行う。

また、破損の度合が著しくないレンガなどは、その多少の汚れも含めて歴史的味わいとして生かしていきたい。

一方、住居から公共施設への用途の変換による、新しい機能への再生に伴う改築では、伝統空間にどのように現代的表現を重ねていくかということがテーマとなる。そしてここでもやはり新しく付加される要素は、あくまでも脇役に徹しつつ、伝統としての主役をもちたてるものとして、まぎらわしい伝統的衣装をまとうない方がよいと考えている。

新しい要素の挿入によって、より歴史的な各部分が強調され、またその新旧が調和し共鳴し合うことで、空間全体が過去を想起させるものになって欲しい。伝統的な建具の装飾などを美しく引き立てるための材料や色彩の選択、オリジナルの空間性を壊さない水周り空間や各設備の挿入の仕方などに配慮する必要があるであろう。また、今後長きにわたって生きながらえる建築として存在していくためにも、将来の利用勝手を制限しすぎない計画であることも重要なのではないだろうか。